

きると子供たちも目を覚ましました。早朝六時四十分、産声とともに「男の子が生まれた」と夫は歓声を挙げました。私は本当に誇らしい気持ちでいっぱいでした。子供たちは喜んで村を走りながら「うちのお母さんが男の子を生みましたよ」と言っているのが聞こえてきました。

それまで私に対して怨讐のように接してきた親戚たちも訪れて、祝福してくれました。息子が生まれることをきっかけとして、親戚たちとも仲良くなりました。

出産して七日目、私は子供を連れて先生に会いさつに行きました。先生は息子を抱きながら俊徳（くんとく）という名前を付けてくださいました。当時の生活は難しいものがありました。が、子供たちはみなすくすく育ってくれました。

一九六四年四月十二日、私は先生から表彰状を受けることになりました。六〇年からの三年路程に参加した食口たちの中で模範になる者を選び、先生自ら書かれた賞状を下されたのです。夢のようなことでした。

表彰状を手にしてときどきする心で読みました。「金粉祥。上の者は三年路程においてみ旨の前に犠牲的生活態度と模範的活動において優秀であったためにこれに表彰状を与える。一九六四年四月十二日、世界基督教統一神霊協会、文鮮明」と書かれてありました。この賞状は家宝第一号と

して後孫たちに代々伝える遺産になりました。その間、伝道地において苦勞も多かったのですが、その小さな苦勞を記憶され天はこのように大きな賞を与えてくださったので、申し訳なく思いました。

そのような祝福された日の夕食を終えて、家庭札拝を行いました。そこで私は、その頂いた表彰状に書かれてあったように、今後、犠牲的な生活、模範的な活動をしていくことを再度決意し、そしてまた、今まで私が成し遂げることができなかったこの内容を子供たちが成し遂げてくれることを願いました。

一九六七年八月には二番目の息子が生まれると、周りの人たちは喜んでくれました。一九六八年には四三〇双の祝福のための修練会が行われることになり、二十三歳になっていた娘を送り出しました。娘は五日目に帰ってきて、私たちに一枚の写真を見せ、「お母さん、この人はどうですか。先生はこの人のことを「前途有望な青年だ。あなたとお似合いだ」とおっしゃいました」と恥かしそうに言いました。そして、崔元福先生が、「お母さんが三年伝道路程に出た後、妹たちを育てながら学校に通い、本当に苦勞が多かった」とお父様に執り成してくださいましたと、祝福の場でのことを話してくれました。（つづく）

## 特別寄稿

# 統一民族史観（第二回）

南北統一に対し北の唯物史観を克服するための統一史観です。（文責・編集部）

## （一）蕩滅の歴史

以上で歴史の第一の性格が「復帰の歴史」であることを明らかにしましたが、次は歴史の第二の性格は「蕩滅の歴史」であることを明らかにしたいと思います。

### ① 蕩滅の意味

まず「蕩滅」の意味を説明します。蕩滅とは、常識的な意味では「借りた借金を他の条件物で相殺すること」です。例えば、一人の農夫が借金をしたので、とうてい返す

道がないとしましょう。そういう場合、その農夫は債権者と次のような合意をし、問題を解決するのです。つまり債権者の家に行つて、一定の期間、家事労働などをするということによって、債権者から借金を返したことにしてもらおうということなのです。そういう場合、借金と家事労働が相殺されることになるので、このことを蕩滅といふのです。

イエス様は、人間が犯した罪は、借金することと同じだとしてしばしば表現されています。例えばイエス様は、王様から借りた一万タラントの借金を返すことができないでいる僕の例（マタイ一八・二四―三五）をあげています。王様



韓国統一思想研究院院長

李相憲

は「もし一萬タラントの借金を返すことができないのであれば、おまえと妻子と持ち物全部を売って返しなさい」と命じました。それらを全部売っても一萬タラントにならないかもしれないが、それで一萬タラントの借金と相殺してやるという意味です。これも蕩減を意味します。ところが、僕がひれ伏して、「必ず借金を返しますから、しばらくお待ちください」と言っていて哀願しました。その姿を見て気の毒に思った王様は「おまえの心掛けは殊勝だ。負債を免じてやるから帰りなさい」と言っていて彼を許してやったのです。これもやはり蕩減なのです。

ところが王から一萬タラントの負債を免じられた僕には、彼から一〇〇タラントの負債をしている仲間がいたのです。王から特別な許しを受けてきたその僕は、自分に借金をしている仲間に、一〇〇タラントを直ちに返すように言いました。仲間はひれ伏して、「しばらく待ってくれ、返すから」と言っていて謝ったのです。

それにもかかわらず、その人を引つ張って行き獄に入れませんでした。他の仲間たちが、このようすを見て彼を憎み、王の所に行つて告げました。王は大変怒つて直ちにその僕を呼びつけました。王は「悪い僕、わたしに頼つたからこそ、あの負債を全部許してやったのだ。わたしが哀

上に述べたような意味をもつ蕩減の原則が、神の救済摂理にも適用されてきました。救いとは、罪悪世界からの救援であり、罪のない世界への復帰を意味します。または罪人が、罪のない人間になること、つまり罪から免れることをいいます。罪人が罪を脱いで、罪のない人間になろうとすれば、神の前で罪の許しを受けなければなりません。墮落によつて神を悲しませたからです。

ところで罪の許しを受けたいならば、必ず行動でもつて見せなければなりません。賛美、祈祷、悔い改め、礼拝、断食、苦行、十一條を捧げること、献納など、いろいろな信仰の行為があります。そのような行為をすることを蕩減条件を立てるということです。それゆえ、復帰摂理上の蕩減は、一定の条件（蕩減条件）を立てて、罪を許してもらつた後、原状に復帰することを意味します。このように蕩減条件を立て、原状に復帰することを「蕩減復帰」といいます。

蕩減条件は罪を許してもらつて原状へ復帰するために立てなければならぬ最も基本的な条件です。それは第一に、信仰生活に入つて神が立てられた中心人物の指導を受けながら、信仰の基盤を築くことです。その時、条件物を捧げる生活もしなければなりません。また一定の期間、苦行の

れんでやったように、あの仲間を哀れんでやるべきではなかったか」としかつて、負債を全部返してしまふまで、彼を獄吏に引き渡したのです。

イエスはこのことを語り終えてから「あなたがためいめいも、もし心から兄弟を許さないならば、私の天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」と語つたのです。以上のイエスのみ言によつて蕩減の意義が明らかになれたと思います。

第一に、蕩減とは負債に関する概念であると同時に、罪に関する概念です。第二に、蕩減とは一定の条件を立てて借金を減らすか相殺するのと同様に、罪を減らすか、なくしてもらふこと（罪を許してもらふこと）を意味します。第三に、蕩減には必ず債務者と債権者、または罪人と神様の代身者がいて、債務者は債権者に、または罪人は神様に一定の条件を立てなければ蕩減（許してもらふこと）を受けることができなことを意味します。第四に、蕩減（許してもらふこと）は一定の条件を立てて、借金のない、あるいは罪を犯さない状態に戻ることに、つまり復帰を意味します。

## ② 復帰摂理と蕩減

条件も立てなければなりません。このような期間を蕩減期間といえます。このようにして信仰の基盤を築くことを信仰基台の造成といえます。この信仰基台の造成の期間（信仰生活）には、上述した悔い改め、断食、修練、祈祷、徹夜、礼拝、伝道、説教など、いろいろな蕩減条件も立てなければなりません。

ところでここにもう一つの基本的な蕩減条件があります。それは神が立てられた中心人物に絶対的に従い、古い自我を完全に清算し、克服することです。自己を完全に小さくしなければなりません。古い自己を完全に清算し、新生しなければなりません。決して罪を許してもらふことはできません。つまり、エデン（天国）に入ることができません。このようにして、指導的な人物に絶対的に従いながら古い自我を完全に清算した時、そのようになった状態を「実体基台」が造成されたといえます。

以上の内容が、神の復帰摂理において人間が罪を脱ぐために立てなければならぬ、基本的な蕩減条件なのです。

## ③ 蕩減の種類

蕩減にはいくつかの種類があります。蕩減の本来の意味は、個人が自分の罪を脱ぐために条件を立てることをいいます。借金をした者が借金を相殺するために条件を立てる

というのが蕩滅の本来の意味です。ところで借金は他人が代わって返すこともできるし、ときには他人を責めて強制的に取り立てることもできます。罪を脱ぐのも同じです。

すなわち個人が蕩滅条件を立てることができない場合、他人が代わってその条件を立ててあげることができ、義人や聖人たちが迫害したことが動機（条件）になって、後に自分が間違ったことを悟り、悔い改めて罪を脱ぐといった蕩滅もあります。こうした蕩滅は、義人や聖人たちは受難とならざるを得ません。このようにして蕩滅には、個人蕩滅、代理蕩滅、受難蕩滅の三種類があるのです。これらに関して、より具体的に説明することにします。

#### 〈個人蕩滅〉

上述したとおり、これは本来の意味の蕩滅であり、一定の条件を立てることによって得られる蕩滅（罪を許してもらうこと）です。前項（「復帰摂理と蕩滅」）で説明した内容が個人蕩滅です。

#### 〈代理蕩滅〉

これは個人が蕩滅条件を立てなければならないにもかかわらず、そうした必要性を理解することができない場合、他人が代わりに蕩滅条件を立ててやることによって、その人が罪を許してもらった場合をいいます。その時、代わりに



天使と組み打ちするヤコブ

は天上あるいは地上でいつそ天の祝福を受けるようになるのです。これを「受難蕩滅の法則」（または簡単に「蕩滅の法則」といいます）。

歴史を振り返ってみれば、神が立てた宗教は、弾圧と迫害の中で、むしろいつそう成長し、迫害を加えた主権者たちは、結局滅んでしまったことを見ることができません。これはすべて受難蕩滅の法則によるものです。ところで迫害を受けた聖人や義人たちは、新約時代には、たいてい天上（霊界）に行ってから祝福を受けましたが、成約時代（メ

条件を立てる人は、その行為が困難であることを知りながら、その人の救いに少しでも役に立つことを願う心で行うのです。

例えば信仰者が他人を伝道したい時、彼のために祈祷、断食、奉仕などの条件を立てる場合がそうです。一人の人間をみ旨に導いてあげるために、多くの人が心を合わせて蕩滅条件を立てるのも、やはり代理蕩滅です。他人のために代理の蕩滅条件を立てる人は、たとえその対象が肯定的な反応を示さないとしても、立てた善の功績はそれだけ天に積まれるようになるのです。

#### 〈受難蕩滅〉

これは善なる人、特に義人や聖賢たちが不本意ながら、蔑視され、ぞんざいに取り扱われ、迫害を受けたりしたとき、つまり苦難を受けたとき、天はその苦難を蕩滅条件にして、天の権限を行使して、迫害を加えた人を悔い改めさせることをいいます。キリスト教徒の迫害に参加して、再びキリスト教徒を迫害しようとするダマスコへ向かっていたサウロ（パウロ）を神（イエス）が権限を行使して、悔い改めさせたことが正にその例です。

万一、迫害を加えた者が悔い改めない場合、天はその迫害者に罰を下します。そして迫害を受けた義人や聖人たちはヤ再臨以後）は地上で祝福を受けるようになるのです。孟子が「順天者は存し、逆天者は滅ぶ」と言ったのは、この（受難）蕩滅の法則が常に働いていたからです。

ところで受難蕩滅において理解すべきことは、第一に、義人たちが悪人たちによって迫害を受けることを神様が予知されて、神自ら、義人たちの忍耐性、道義性を試すために苦しみを与えるという受難蕩滅もあるということです。旧約時代に、神がヤボクの川辺に天使を送り、エサウを迎えようとしているヤコブを相撲で試したことがその例です。

またモーセをしてバロを屈伏させると約束した神が、突然、モーセを殺そうとして試したこともそうした例です。神による受難蕩滅は義人たちを鍛練させるためのものです。第二に、この受難蕩滅が効果をあらわすためには、義人たちは最後まで義の道、つまり真の愛の道を固く守らなければならぬということです。義の道が険しいからといって、途中で放棄するならば、蕩滅の法則がそれ以上適用されることができないだけでなく、それが逆に作用し、放棄した本人に不運が訪れることが少なくありません。

#### ④ 選民の蕩滅

次は蕩滅の歴史について扱います。結論からいえば、韓

民族は昔から善の民族であり、道義民族であったために、選民として立てられた三国時代から受難蕩滅の道を歩んできたのです。したがって韓民族の歴史は受難の歴史だったのです。ところでここで明確にすべきことは、果たして韓民族が選民になる資格がある民族なのかという問題です。これに関して検討してみたいと思います。

#### a 選民の資格

まず選民の資格とはいかなるものかということ調べてみることにします。イスラエル民族が備えた選民の資格とはいったいどういうものだったのでしょうか？ 聖書によれば、イスラエル民族が選民になったのは、彼らの先祖のアブラハムが天に選ばれたことによるとされています（創一七・五）。ところがこの選びにおいてある基準や条件があったわけではありません。ただ神の自由意思と愛によるものだとされています（申命記七・六・八）。しかし選ばれた後には次のような条件が要求されたのです。それは神が与えた定めとおきてを必ず守らなければならないことです（申命記七・一一、一一・二二）。そして万一、こうした定めとおきてが守られないときには、懲罰が加えられるとされています（アモス書二・二、申命記八・一九）。

したがって、イスラエル民族が選民であるかどうかを知

るためには、彼らがいかなる資格を持って、どのように戒律と規律を守ったのか、あるいは戒律と規律を守らなかったことによっていかなる罰を受けたかという、結果的事実を調べてみるほかはありません。そして結果的事実として次のようなことが分かったのです。

第一に、イスラエル民族はアブラハムを先祖とする単一民族としての主体性の自覚を持って歴史をつくってきたということでした。第二に、戒律と規律を經典として持ちながら、神を祀り、神に絶対服従し、神を敬ったということでした。第三に、神の命に従って義の道を歩まなければならぬ民族であるため（サムエル記上二二・二三）、他の民族を侵犯することができなかったということでした。第四に、しばしば神の戒めを守らなかったことによって多くの罰を受けたため、イスラエルの歴史は受難の歴史にならざるを得なかったということです。この四つの事実からイスラエル民族が選民であったことが分かります。

したがって韓民族が選民であるか否かを知るためには、韓民族も歴史的にこのような四つのことを歴史的事実として持っていたかどうか、調べてみればよいのです。結論からいえば、韓民族の歴史にもこうした事実がはっきりと現れているのです。

第一に、韓民族もイスラエル民族のように単一民族です。

この事実は全国民がみな信じているのです。しかし、多分このことに異論を立てる人もいるでしょう。つまり韓国人の姓名の中には、本貫のルーツが中国にある場合も多くあるのではないかと、ということですが。しかしすでに述べたように、統一史観の立場は檀君神話の内容の展開を民族史と見る立場であるために、檀君を国祖と見えています。実際、大多数の韓民族はそのように信じてきたし、また今でも、そのように信じているのです。そして中国の地には、むしろわれわれの祖先である東夷族の子孫たちが多く住んでいるという証拠が明らかにされているのです。したがって本貫のルーツがたとえ中国だとしても、そのルーツは檀君族の東夷族であるという論理も十分に成り立つのです。それゆえ、韓民族が単一民族ではないとあえて主張する理由はないのです。

第二に、韓民族もイスラエル民族と同じように、律法に相当する經典（三一神話、神事記、神誌秘詞など）と十戒に相当する八条法禁を持っていました。また祭と聖殿の觀念に相当する祭天儀式と聖地（蘇塗）の觀念もあつたのです。特に祭天の儀式は檀君以来、高麗時代に至るまで、三六〇〇年間も続けて行われたものであり、天を敬い畏れる

思想がいかに深かったかが理解できます。イスラエル民族が戒めを守り、天命と天道に従順であり（申命記一八・九、一一・二二、五・三三）、天の前に献祭してきた民族であったように、韓民族もそのような民族であったのです。

第三に、韓民族もイスラエル民族と同じく、善の民族、義の民族であったのであり、したがって義の精神に従って、隣国を侵略したことがありませんでした。中国においても、韓民族は昔から東夷族として、平和の民族として、知られていたのです。漢書の「地理誌」には、東夷族は天性が従順であり、三方の蛮族（西戎、南蛮、北狄）とは民族性が違う（異於三方之外）と記録されています。また中国の古い史書の一つである「山海経」には、青丘国（東夷族の国）で、その国の国民は「衣冠をかぶり、剣を帯びていて、しかも互いにゆずり合って争わない」（衣冠帯剣、互譲不爭）と記録されています。

また魯の国の孔子も、東夷族を君子の民族としてほめたたえています。彼は中原の国を訪ねて、自分の教えを実施しようとしたが、思いどおりにならなかったため故郷に戻って弟子の養成に力を注いでいた時のことでした。ある日、孔子が「筏にでも乗って海に浮んで、東夷族の住んでいる地に行って、そこに住んでみたい（乗桴浮於海、欲

居九夷) (九夷＝東夷) と言いました。その話を聞いた弟子たちが「どうしてあのむさくるしい蛮族の地に行つて住もうとされるのですか (陋、如之何)」と聞いたところ、孔子は次のように答えたのです。つまり「君子たちが住んでいる所だから、どうしてむさくるしいことがあるだろうか? (君子居之、何陋之有)」(「論語」、子罕篇)。

君子とは、礼儀が正しく、徳を備えた知識人のことを意味し、特に孔子においては、これに加えて三つの恐れを知る人物が君子だったので。すなわち、天命と大人と聖人の言葉を恐れる人間が君子だったので (君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言……論語、季氏篇)。したがって東夷族である韓民族は、本来このように孔子が高く評価しているように、君子と同じような徳性を持った道義の民族だったので。

徳性を持つ道義の民族は、同時に平和を尊ぶ平和の民族です。したがって、平和を破壊する不義の侵略勢力に対しては強力に対抗して闘う民族であると同時に、隣りの国を侵犯することは慎む民族だったので。

高麗の成宗時代に契丹が北方を侵略してきたとき、徐熙將軍は軍使として国書を持って単身で敵陣に入つて行き、敵將の蘇遜寧と談判して、韓民族が決して他国を侵犯する

ことのない平和民族であることを力説しながら、彼らが進んで退却するように説得した結果、そのとおりになったのです。平和を崇め尊ぶ民族精神の現れの一例です。

万一、韓民族が隣国を侵犯しようとして企てれば、天はこれを制止しました。その例が李成桂による北伐軍の威化島回軍だったので。高麗末に李成桂は朝廷の方針に従つて、北伐のために進軍を開始し、威化島に至ったのですが、梅雨による増水と疫病のため、結局、軍隊を引き返してしまつたのです。これは天が北伐を許さなかつたためだと見るのです。

なぜ天は北伐を許さなかつたのでしょうか? 善なる個人や民族が受けなければならぬ受難蕩滅を避けようとするれば、その時まで築いてきた善の功績が崩れるからです。韓民族は選民であるためメシヤが再臨するようになっていきます。したがって、いかに苦しくても、つらくても、受難蕩滅を勝ち抜かねばならないのが神のみ旨です。

聖書には次のような聖句があります。「愛する者たちよ、自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである」(ロマ書二・一九)。これは迫害を受ける義人に対して

だけでなく、苦難を受ける選民つまり韓民族にも該当する聖句なのです。神がどのように復讐するかといえば、再臨のメシヤを地上に降臨させ、メシヤを通じて真の愛と真理でもって報いるのです。「復讐をする」ということは、「過去の怨讐たちを武力ではなく平和的な方法で自然屈伏させること」を意味するのです。今日、実際に再臨のメシヤが来られ、過去の怨讐たちであった日本、中国、米国、ロシアなどを、真理(思想)と真の愛でもって自然屈伏させておられるのです。その方がまさしく文鮮明先生なのです。

次に、選民であるイスラエル民族史に現れた四番目の結果的事実は、神の戒めを守らなかつたために罰を受けたという事実ですが、この点においても韓民族は同じです。神の戒めに従わなかつたということは、第一に、信仰心が落ちて異邦の神に仕えたことであり、第二に、神が送られた預言者たちを迫害したことです。そして神がいかにして罰を下したかといえば、異邦人をして侵略させたのです。神はイスラエル民族が戒めを守らなければ、異邦人(敵)の手にかけると言われました(サムエル記上二八・一九、列王記上八・四六)。これが正に異邦人をして攻めさせるという意味であり、実際に神は何度もそうさせたのです。

これは東洋の「天道に逆うときは必ず天罰を受ける」、「逆天者は滅び、順天者は存する」という教えと一致する天理として、統一史観の受難蕩滅の法則に該当するものです。こうして天命に逆うイスラエル民族は厳しい天罰を受け、甚大な被害を被り、そして悔い改めて再び神への信仰と忠誠を回復するのが常だったので。そのような訓練によつて彼らは鍛練されたのです。

このように、しばしば外国からの侵入を受けたという点において、韓民族も同じなのです。三国時代以後だけを見ても、北方と南方から大小合わせて、九〇〇余回も侵犯を受けたという事実が知られています。その中には大規模の侵襲も多くありました。大規模な侵襲のときに受けた被害は筆舌に尽くし難いものでした。数多くの財産や文化財が破壊され、数多くの人命が犠牲にされ、大勢の人々が捕虜として連行されていきました。そのようにして、この国の山や野原や谷間に、先祖たちの流した怨みの血と涙の跡がつかないところがないほどになったのです。

この国の純朴な国民たちは、そうした侵略を受ける度に、不安、絶望、悲しみ、憤り、切なさなどで、言いつくせない心的な打撃を受けたのです。こうして韓民族は世界に類例のない「恨が深く身にしみた」民族になりました。すな

わち、韓民族も、イスラエル民族と同様に、受難の民族であり、したがってその民族史は受難蕩滅の歴史（蕩滅の歴史）となったのです。

#### b 民族史と蕩滅の歴史

このように韓民族の歴史に現れた客観的事実を見ても、韓民族の歴史は間違いなく、選民の歴史であると同時に蕩滅の歴史であることが明らかなのです。それでは、韓民族が具体的にどのような受難蕩滅を受けてきたのか、調べてみることにします。

すでに触れたように、受難蕩滅とは、天がこの民族を受難の道に追い出したことをいいます。ではなぜ、天はこの民族を苦難の道に追い出したのでしょうか。それはしばしば、国王、臣下、権勢家たちが天道に背いたからです。ちょうどそれは旧約時代のイスラエル民族が天命に逆らったとき、異邦の民が侵略したのと同じです。いくつかの例を挙げてみます。壬辰倭乱は当時（宣祖時代）、党派（東人、西人、南人、北人などの朋党が争いをこととしていた）、しかも義兵論を唱えた李栗谷の提言を黙殺したため、自ら招いた災いだったのです。それから麗唐戦争すなわち唐の太宗の侵略は、当時の大臣（莫離支）であった淵蓋蘇文が国王を殺害し、独裁政治を強行したために招いた結果だった

#### c 民族史と善悪の闘争史

以上でイスラエル歴史と韓民族の歴史が蕩滅（受難蕩滅）の歴史であることを明らかにしましたが、次に韓民族の歴史が善悪の闘争史でもあるということを開明にしたいと思います。すでに述べたように、北韓の民族主体史観はマルクス・レーニンの唯物史観に従って韓国史を階級闘争の歴史と見ています。（もちろん北韓の歴史学者たちは、イスラエル歴史と韓国史との関係が分かるはずがありません）。北韓の歴史学者たちは、紀元前八〜九世紀に階級社会である奴隸社会が形成され、紀元前後の約一世紀の間に封建社会が立てられた後、それが李氏朝鮮時代まで継続したと言っています。しかしながら、いかなる階級闘争によって、いかに階級社会の発展と変革が行われたか、具体的に明らかにしていません。

韓国史には数多くの闘争が行われてきましたが、その中であえて階級闘争と見なすことのできるものがあるとしたら、民乱や奴隸反乱などです。しかしそれは全体の闘争の一部分に過ぎません。外国の侵略を受けただけでも、九〇〇回以上にもなり、その他、権勢家や地方の官史や豪族たちが起こした民乱も少なくなかったし、王族同士の争いもありました。このようなさまざまな争いが韓民族史に現れ

たのです。つまりこれらはみな、天の懲らしめだったので

す。高麗時代に蒙古が四十年間に六回も侵入して、選民の地を廢墟としたのも例外ではありません。外戚権臣、権門の専横が二十年間に及んだ政治の下で、国王は名ばかりの存在になってしまいました。権臣たちは私欲を満たすために反乱を起こし、仲間同士で争ったのであり、塗炭の苦しみを味わった民衆の苦痛と怨みの声は極に達し、至る所で民衆の反乱が起きました。当時の権勢家たちはあまりにも天道に背いたので、そして、それに対する天の懲らしめが、四十年間にわたる六回の蒙古軍の侵入として現れたのです。

このように神はこの民族を苦難の道に追い出したのですが、これは選民をして道義精神でもって試練に打ち勝つようにせしめ、実際に試練を克服すれば、以前の罪が許されるのです。そして最終的にメシヤを降臨させて、この民族に祝福を与え、同時にすべての隣接国（怨讐の国）を救うのです。これが、神がこの民族を蕩滅の道を歩ませた摂理のみ旨だったので、このように深い意味が蕩滅摂理の背後にあったのです。

た闘争の事実なのですが、それをみな階級闘争という言葉で片付けようとすれば、物笑いになるしかありません。

韓民族の歴史を闘争史という観点から見ると、それは善悪の闘争史です。歴史上のすべての闘争は、そのとき、そのときの状況下で、より善なる側（より天道に近い側）とより悪なる側（より天道に遠い側）との闘いだったので、権臣の反乱の場合、例えば、高麗時代の李資謙の乱においては李資謙が悪なる側だったし、李朝の純祖時代の洪景来の乱の場合は洪景来が善の側でありました。民乱の場合はいわゆる民衆の側が善なる側だったので、外侮を受けたときは、侵略者が無条件に悪なる側であり、侵略を受けた側が善なる側であったのです。四・一九（一九六〇年四月十九日、学生たちが起こした義挙）のときは、学生たちが善なる側であったし、五・一六（一九六一年、軍人たちが起こした革命）のときは、軍人たちが善なる側だったので、韓国史におけるすべての闘争は、その種類を問わず、すべて「善悪の闘争」という概念の中にまとめることができるのです。

一つの王朝が倒れて新しい王朝が立つ場合の闘争も善悪闘争でありました。百済が新羅に滅ばされたのもそうです。百済の第三十代の武王と次の義慈王は、何の必要もないの

に、しばしば新羅を包圍したり攻撃したりしたのです。また享樂と奢侈によつて、国庫を浪費し、民の不满を受けたために、悪の側になったのです。一方、新羅は花郎道の精神で強く団結しており、新羅の百濟への侵攻は報怨、懲悪という性格をもった行動であつたのであり、天道に近かつたので、善の側でした。また高麗が滅んで李朝が立てられる王朝交替の際、高麗は失政と不正を行つていたので、天道に逆つて悪の側に立つたのであり、民衆の側に立つて政治改革を行つた李成桂は善の側でした。

以上でもつて民族の歴史に現れた大部分の戦いは階級闘争ではなくて、善悪闘争であつたということが明らかになつたと思います。王朝が交替したのも、階級闘争ではなくて善悪闘争によるのであり、民乱や奴隸反乱さえも、実際は階級意識をもつた闘争というよりも、人間としての生存の基本権を踏みにじろうとする、権勢家たちの悪に対して国民の善なる心が抗争したものです。したがつて民乱において、民は善の側であり、王を中心とした権勢家たちは悪の側でありました。このように見る時に、「民族闘争史は階級闘争の歴史である」という北韓の主張は、大韓民国の共産革命を合理化するための策略的な歴史観にすぎないの

この民族が善の民族であるということは、善なる民族性を持つた民族であるということの意味します。孔子も言つたように、この民族は、本来、東夷民族であり、また山海経にもあるように、君子の民族であり、衣冠帯剣をして互いに争わない民族、すなわち文武を兼ねながら道義を高める民族であり、敬天愛人の民族です。神によつて選ばれたのは、正にこの民族の民族性です。この民族性を見て、神はこの民族を選んだのです。しかし内憂外患の試練のうち、国王を中心とした少なからざる政治家たちや官吏たちが、外来勢力の悪なる思想に汚されて、天道に背反する悪徳権勢家となつてしまつたのです。

だからといって支配層がみな悪徳権勢家であつたとは言えないのです。国王の中には善君も少なくなつたのであり、臣下の中にも忠臣、功臣も多くいました。このような国王や臣下を中心として、国民は文字通り選民の民族性を保つたのです。この民族が厳しい試練を体験しながら、世界に冠たる道義文化、芸術文化を形成しえたという事実は、このような善なる国王と国民が一つになつて選民としての民族性を守りえたことの証明です。

歴史上に現れた暗君、暴君、奸臣、逆臣、乱臣たちは、肉身はたとえ韓民族であつても、民族性という点から見れ

です。わが民族の歴史は疑いもなく、選民の歴史であると同時に、善悪闘争の歴史でありました。

#### d 蕩滅の歴史と善悪闘争の歴史

蕩滅の歴史とは、受難蕩滅を受けてきた歴史のことであつて、善なる国民が悪の勢力のために苦痛を受けてきた歴史であることを意味します。したがつて蕩滅の歴史とは、正に善悪闘争の歴史です。蕩滅の歴史と善悪の闘争の歴史は別のものではなく、同一なる歴史を外的な摂理から見れば善悪闘争史であり、内的な摂理から見れば蕩滅の歴史となるのです。

ここで、果たしてこの民族が善なる民族であろうか、という疑問が生じるのではないかと思います。民族史に現れた結果的事実を見れば、とても善なる道義の民族とはいえないようなことが多くあります。どの王朝も、苛斂誅求のこととし、党利党略に捕われた政党、国の政治を専横する悪徳権臣たち、民衆を利用して反乱を起こした地方の豪族たち、享樂と奢侈にふけて国事を忘れる暗君、暴君などがしばしば現れたのがこの民族の歴史であることを考える時、誰もこの民族が善の民族であるとは考えにくいのです。けれどもそれは表面的な観点にすぎないことを知るべきです。

ば、彼らは外来の悪徳勢力と異なるところはありません。旧約時代のイスラエルの王アハブは、その妻イザベルによつて異邦人の神バールを迎え入れ、バールの神殿を立て、その前で礼拝までした背教の王でした。それで当時の預言者エリヤは彼を厳しく非難して、背教の罪に対する罰を宣告したのです。その時、エリヤの命令に違反したアハブ王の心は、すでにバール神に従う異邦人となつていたのでした。それと同じく、この民族の歴史上に現れた悪徳の王や権臣たちは選民ではなくて、外侵勢力の悪の思想に染つた外部の勢力の代理人でしかなかったのです。このように見る時、選民としての民族性とは、原則的に敬天愛人の道義精神を中心として、文武を兼ね合わせた善の民族性のことを言います。このような善なる民族性が長い間、受難蕩滅を受けてきたという歴史が、すなわち韓民族の蕩滅の歴史であつたのです。

ところでこのような善の民族性を心的にも肉身的にも代表して受けてきた民族層がありました。その層とは、天心をその心に反映させた庶民層であり、純白な一般の平民層です。これらの庶民層と、善君、忠臣、孝子、道人、宗教人、烈士、義人、義兵、愛国志士等が正に善なる民族層だったので、彼らこそ「善民族（善族）」なのです。二〇〇〇年

の間、選民として選ばれて、実際に身と心を投じて、血と

涙と汗を流しながら受難蕩滅を忍んだ民族層とは、正にこ

れらの善族であったのでした。それ以外の暗君、逆臣、乱臣等は、善族の資格のない、悪なる外来思想の代理者であったのです。もちろん彼らも、外敵の侵略を受けた時に、

善族と共に外来勢力を追い出したこともあり、そのときはそれに寄与しただけの善の功績は、天の考課表に記録として残されたことでしょう。しかしそれだけなのです。

このように選民の概念を原則的に善なる民族、現実的に天心を反映させた民族層（善族）であると規定する時、選民の蕩滅の歴史は、そのまま善悪闘争の歴史となります。

なぜならば蕩滅とは、選民が国内、国外の悪の勢力によって苦痛を受ける過程であり、善悪の闘争も、内的外的に、善の側が悪の側の攻勢に対して闘う苦痛の過程であるからです。以上で選民としての韓民族の歴史は、蕩滅の歴史であると同時に、善悪闘争の歴史であることを説明しました。したがって、北韓の「民族史は階級闘争の歴史である」という主張は完全に虚構であるということが明らかにされたと思います。

（一）民族的受難克服の意味

（一）民族的受難克服の意味

すでに述べたように、三国時代以後、二〇〇〇年の間、この国は数多くの侵入を受けたのであって、その度に、多くの人々の殺傷、捕虜、拉致、財産や文化財の焼失と破壊、などの被害を受けたのです。

このような民族的受難の意味に関して北韓の民族主体史観は一切触れていません。ただそれらの侵入が人民大衆を中心とした抵抗によって撃退されたと記録しているだけです。また撃退する度に、追撃して外国に侵入しえたにもかかわらず、侵攻しなかったという事実に対しても、何も言っていない。三国時代以後、今日に至るまで、多くの侵入は、即刻的なあるいは長期にわたった抗争によって、韓民族の一致団結した抵抗によって、結局はみな撃退されたのでした。そのたびに、莫大な被害を受けたのは、この民族が選民すなわち善族であったからです。すでに説明したように、選民は、いろいろな蕩滅受難の試練の中で悪の勢力を撃退しながら、天道に一致する道義文化を立てなければならぬという歴史的使命を負わされていたのです。したがって、民族の歴史は必然的に蕩滅の歴史、善悪闘争の歴史であり、受難の歴史とならざるを得なかったのです。

(つづく)

講演

信念と確信をもって伝道する

私たちは外的に見たら弱い一人の人間に違いないの

ですが、とても大切な仕事をしています。「神様を解

放してさしあげる」といっことは、歴史始まって以来

誰も語ったことのない言葉です。



실  
현  
김  
성  
익

祈祷の必要性

私たちが霊的な恵みを受けるためには、まず祈祷を捧げなければなりません。祈祷は皆さんが毎日食べなければならぬ霊的食事のようなものです。皆さんが一日に三食のご飯を食べるように、祈祷の積み重ねを通して自分の見えない霊人体が成長するようになっていくのです。

ですから、信仰生活にとって祈祷こそが最も大切であり、最も必要であるということが分かれば、だれしも祈祷せざるを得なくなるのです。それでお父様も、「一度祈祷の味を味わった人は、祈祷せずにはいられなくなる」とおっしゃっています。私たちは深く祈ることによって、神の霊が本当に今自分に近づいているという感覚を持たなければなりません。

また、祈祷をたくさんしている食口たちのいる教会はとも温かく、その雰囲気は、神様が臨在されていることを実感できます。しかし、そうでない教会に行ってみると、何か冷たいものを感じるのです。

それで昔、お父様は本部教会に、お婆さんたちを集めて